

## 硫黄島レポート

鹿児島大学大学院水産学研究科 1年 中村理絵

講義の一環として7月14-15日の間に硫黄島を訪れた。この講義を通して、今まで私が知る事のなかった硫黄島の現状を知ることができた。

まず私が感じたことは、ほとんどの物資を船で運ぶため、船の存在が必要不可欠であるということだ。食料や日用品だけではなく、火力発電で使う重油も船で運ぶと聞いてとても驚いた。もし台風が来て船が何日も欠航したらかなりの被害を受けることになる。また島にはたくさんの木があり、自然豊かであると思ったが、農作物がほとんど育たないことにも驚いた。硫黄島特有の火山ガスや酸性土壌、孔雀の被害により、農作物が育たないらしい。また水産物を市内に輸送するにしても、輸送コストや鮮度保持のコストがかかるため、普通よりも水産物の値段が上がってしまう現状も聞いた。これらのことから、島で暮らすには避けられない様々な問題点があり、どう改善するかによって島の今後の発展に繋がると感じた。

しかし、子供の教育面ではこれ以上ない好環境であるとも感じた。小さいころから自然と共存して暮らせるということ、少人数であるため、学年の違う子供たちとも触れ合う機会があり、いろんな気持ちが育つこと、少人数で授業を行うため勉強を教えやすい、などの利点がある。またジャンベという、アフリカの楽器を島の文化として取り入れ、大人と子供が一緒になって音楽を楽しむ姿にとっても感動した。音楽を通して、子供のコミュニケーション能力も育つのだろう。

また硫黄島滞在 2 日目早朝に現地の方の協力のおかげで、硫黄島周辺のプランクトン採取を行うことができた。現地で採取したプランクトンを標本処理し、検鏡した結果について述べようと思う。サンプル採取は 5 地点で行った。(図参照) 海洋環境データがないため、直接的な地点間比較はできなかったが、各地点の傾向を示そうと思う。

いずれの地点でもカイアシ類が優占する分類群であった。またエビの幼生もいずれの地点でも確認された。比較的硫黄の流入が少ない S1 や S2 ではヤムシや貝形類、尾虫類など多くの分類群がみられたが、S3~S5 ではこれらの分類群はあまりみられなかった。S3~S5 では硫黄が流入しており褐色であるため、これらの分類群にとっては生息しにくい環境なのかもしれない。



図. サンプル採取地点. S:Station, S5:岸壁で採取.